

テーマ：「空を眺めることができるゆとりと、
人が集い手を取りふれあえる空間のあるまち」

「あなたは最近、空を眺めたことがありますか？」という質問は、現代日本ではあまりにも愚問だと言うことが出来ます。それは、現代日本人でしばしば空を見上げるといふ人はごく少数派に過ぎないからです。その理由として、現代日本において空を眺める必要はないということが理由として上げられます。例えば、かつては空を見て空模様から天気情報、太陽の位置から時間の情報を得ていましたが、現代では空の天気を知ろうとすればテレビや新聞の天気予報を見れば良いし、時間を知らうとすれば時計を見ればことは済みます。しかし、また別の理由として、現代特有の時間に追われる忙しさなどの現代特有病により、常に人間の頭上にあり、人間より大きな存在である空というものを眺める心の“ゆとり”が欠乏していると言えない事はありません。私は、人にとって空は一種の“ゆとり”の象徴といえとと考えています。

また、現代日本社会の問題のひとつといえる『地域地区のコミュニティー（生活共同体）の崩壊』の問題も同時に考えました。日本のコミュニティーは、戦争が終結し戦争のために地区住民が一致団結する必要が消滅した第2次世界大戦後から崩壊が始まったといえ、現在では地域集会などのイベントがない限り、地域地区内の隣人たちのふれあいは皆無に等しい状態だと言えます。『隣人は誰だっけ？』というようなことがしばしばあります。地域地区のコミュニティーは、ただ住民同士がふれあうだけのものでなく、まちづくりの面からもいろいろと有効的であるとも言えなくもありません。

したがって、私は今回、「空を眺めることができるゆとりと、人が集い手を取りふれあえる空間のあるまち」づくりを提案していきたいと思えます。

まず、空を眺めることができる環境作りが必要であると考えます。日本の空は常に季節と連動しており、空は一年中四季折々いろいろな表情を見せてくれます。しかし日本で実際に空を見上げ眺めようとするとき、必ずと言っていいほどなにかしら人工的なものがその視野に入り、折角の景色を台無しにしているように思えてなりません。また、田舎の田んぼのど真ん中から空を見上げるといふのならともかく、都市部において日本では身近で安全にゆっくりと空を見上げられる場所はあまり多いとはいえないのが現状だといえます。

そこで、空を見上げられる場所として歩行者専用道路、自動車が走る道路とは完全に独立した安全な歩道、いわゆる遊歩道の設置を考えます。この道路を使う交通手段は徒歩のみのため、大きな交通事故の発生は考えられず、交通弱者である人の安全を確保することができ、空を見上げながら歩いても、立ち止まってゆっくり見ても快適な空間とすることができます。ただし、空を見上げて人工物がその視野に飛び込んでくるのはあまり理想的とはいえないので、遊歩道沿いにグリーンベルト（緑地帯）を作ります。また、この歩道に接している敷地の境界はグリーンベルトの一部としてもらう（グリーンベルトの存在を大きくする）、敷地の建物はグリーンベルトの木々よりも高い建築物の建築を制限する（視界に人工物が飛び込まないようにする）などして歩道からの景色・空間の維持を行います。さらに、日本の空を圧迫している電線・電柱は頭上より上に一切ないように徹底します。

地域地区住民のコミュニティーが崩壊した原因として、コミュニティーは必ずしも必要なものでなくなっ

てしまったという事が考えられます。これは行政主導でまちの整備が行われたため、地域住民の出番が無くなってしまったということが挙げられます。確かに、行政主導によりまちが整備されたことでまちは住みやすく利便性の高いものになりましたが、どのまちも画一的になり、地域地区とそれが本当に一致しているのかが判りにくくなってしまった点は否めません。

それなら、地域地区のコミュニティーを必要とする空間を作れば良いと思います。この遊歩道やグリーンベルトの管理を地域地区の住民の手に委ねてみるのはどうだろうかと思えます。多分、行政主導のものよりも利便性などの幾つかの面で劣るものが発生するかもしれませんが、住民のハンドメイドによるこの空間は地域ごとに変化の富んだ、地域に密着した住民のお気に入りの空間になると想像しています。この活動により地域地区内の活動が活発になり、地域地区のコミュニティーの復興・再生は十分にありえます。また、地域地区内で更なるまちづくりの議論が行われるようになり、より新たなまちづくりの礎になりうる可能性もありえます。この空間を地域住民同士の共同作業によって近隣住民の顔を知る、飛躍的なまちづくりへの良い機会になればと考えています。

そして、これらによって手に入れた「空を眺められるゆとりと、人が集い手を取りふれあえる空間」を上手に運用する必要があります。それには、この空間に似合った心細かな設備が必要で、高速道路でたとえるとサービスエリアやパーキングエリアにあたるものを考えています。それは、道路の端にベンチを置いて気軽に『井戸端会議』が出来るようにしたり、道路の横に小さな芝生広場を設けて地に背をつけてのんびり空を見ながら寝転がられるようするなどの、ゆとりある時間と空間を楽しむために役立つものにします。

私が目指してきたもの、それはまだ自動車など復旧していない頃の、住宅の裏手にあった物静かなかつての『裏路地』です。現在でこそ裏路地というと、ただ自動車の抜け道という意味でしかなくなり、「裏路地イコール道が狭い上、自動車が頻繁に取って危険」ということであまり良い意味を持ちませんが、かつての裏路地は住民の生活空間であり、住民交流の場であると同時に憩いの場というように多目的な用途がある空間でした。やはり、現在の地域地区のコミュニティー崩壊には、この裏路地の崩壊が原因の一端を握っているのかもしれませんが。そこで思いついたのが今回の、ゆとりがあり、人がふれあえて安全な裏路地の再興です。ただし、時代は常に流れ続けており、現代の風潮にあった空間づくりが必要ということで今回のような「空を眺められるゆとり」と、“人が集い手を取りふれあえる”空間のあるまちづくりを考案し、提案しました。

この提案書を企画すること通して、まちづくりの大変さ、またその大切さを直に実感することができ、大変良い機会になりました。